

シラバスの記入例と各講義設定の到達目標例

各講義の講師の所属及び役職は2024年3月現在のものです																											
<p>【講義詳細ページ 記入例】</p> <p>講義設定の観点は該当するものに を記載 講義形式は該当する記号を記載</p>	<table border="1"> <thead> <tr> <th rowspan="2">講義</th> <th colspan="5">講義設定の観点</th> <th rowspan="2">講義形式</th> </tr> <tr> <th></th> <th></th> <th></th> <th></th> <th></th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>(講義名)</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>(講義名)</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> </tbody> </table>	講義	講義設定の観点					講義形式						(講義名)							(講義名)						
講義	講義設定の観点					講義形式																					
(講義名)																											
(講義名)																											
<p>【講義設定の観点】</p>	<p>【講義形式】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・講師 1 名による講義・・・ ・複数名講師による講義・・・ ・インタビュー・対談講義・・・ ・シンポジウム講義・・・ 																										
<p>研修講義設定の 5 観点と各観点における到達目標（上段）及び小目標例（下段）</p>																											
<p>心理職としての倫理観・基本姿勢</p>	<p>人間の尊厳に対する深い畏敬の念と、強く温かな関心を持ち、時・所・位を踏まえて誠実に職務にあたる基本的姿勢と態度を身につける。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人間への畏敬の念に基づき、謙虚な人間理解の姿勢と態度を養う。 ・当事者の尊厳を重んじた主体性を損なわない支援とは何かを考える。 ・人間の価値観の多様性への理解を深め、支援実践において生じる倫理的ジレンマについて知り、自分の立場で可能な最善の支援とは何かを考える。 ・対人援助における基本的姿勢やふるまいを考え、身につけ実践する。 																										
<p>人間の生活基盤に関する理解</p>	<p>複雑かつ変化する社会状況を認識し、時代や職場の現状に即して、心理職として果たすべき社会的責任と使命を自覚する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人間社会の基本である法の理念や法に基づく権利と責任を理解する。 ・人間社会を支える諸制度と人々の生活との関わりを理解する。 ・社会経済的状況や多文化の理解に基づき、生活や心の健康を考える。 ・心身の健康に深く関わる医療の現状について理解する。 ・人間の営為や社会生活と文化、心理学との関わりを理解する。 																										
<p>多職種との連携・協働</p>	<p>生活の多様性に基づき専門的な支援を行う多職種の価値観と役割を理解して、支援体制全体の中で自らの役割を適切に果たすことができる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・複雑な現代社会において心理職が可能な支援とその限界を理解する。 ・多職種の価値観や役割、チームにおける機能を理解し尊重する。 ・多職種との協働における心理職の役割を理解するとともに、チーム全体での支援がよりよく進むように自らのふるまい方を考える。 ・チームで支援するために心理職として必要な技能を身につける。 																										
<p>全人的・包括的アセスメント</p>	<p>人間の営為に関わる背景や要因を広く理解し、当事者のニーズを大切にしながら、一人一人の理解を多面的かつ的確に行うことができる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人間が人間を理解しようとすることに対する畏怖の気持ちをもつ。 ・人間を取り巻く多様な環境の理解をとおして、多面的なアセスメントの基本を理解する。心理検査の効用と限界を理解する。 ・適切な観察方法や当事者のニーズの把握、幅広い情報収集の方法を理解し、それらの情報を適切に用いて、支援の根拠となる仮説を立てる。 																										
<p>内省的な支援の実践</p>	<p>心理職として行った支援やチームで行った支援を、当事者の視点及び多角的な視点から率直に評価し、その後の実践に結びつけることができる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自らのアセスメントや心理的支援が、当事者の尊厳や主体性を損なわなかったかについて、その方の人権や人間の多様性の観点に照らして、適切に検証する。 ・支援が十分に効果的であったのかを多角的、客観的視点で検討する。 ・自らの失敗は率直に認識し、自己のアセスメントを含め、その原因を多面的に振り返る。 ・支援における課題に自ら気づき、修正の方略を考える。 																										

研修シラバス

研修No	B-4-1		視聴時間	172分	
研修テーマ	マイノリティと多様性の理解 (172分)			受講料	4,400円

研修の趣旨

「文化」は人間が築き上げてきた生活様式の全体を指し、人間活動の全ての場に風土や土壌などとして存在する。日本文化という大きなものから、地域文化、学校文化、職場文化、家庭文化などあらゆる場に文化が存在している。健康な文化は、人々が生きる基盤として、暮らしを豊かにし、人々に活力を与え、未来へと方向づける力となるが、一方でその逆もある。文化はあらゆる点で人間の営みに浸透して、大きな影響を与えている。さらに心理的支援を行うそれぞれの現場にも文化があり、様々な心理的支援の手立て（心理療法等）も文化的背景を基盤として成立している。心理的支援を必要とする当事者の中には、文化的マイノリティ（人種、言語、障害など）により生きにくさを抱えている人々が少なくない。本研修では文化的マイノリティについての理解を深めていくことも心理的支援に必要な視点である。ここでは文化のさまざまな側面について、さまざまな立場の視点から学ぶことを通して視野を広げたい。

研修の目標

生活文化の多様性について理解し、現代の課題について考える。
 心理的支援に文化的背景を視野に入れ検討することの重要性を理解する。
 文化的マイノリティの理解と心理的支援を実践する者の姿勢について考える。
 異文化間葛藤とこころの危機について理解する。

研修講義設定の観点	講義形式
心理職としての倫理感・基本姿勢 人間の生活基盤に関する理解 多職種との連携・協働 全人的・包括的アセスメント 内省的な支援の実践	講師1名による講義 複数名講師による講義 インタビュー・対談講義 シンポジウム講義

研修テーマの講義（概要）

講義	講義設定の観点					講義形式	講義時間	講師
マイノリティの文化と心理的支援 さまざまなマイノリティと 多様性の理解						○	45分 38分	加賀美 常美代（目白大学、教授） 熊谷 晋一郎（東京大学、准教授）
文化間移動のこころへの影響 外国につながる子どもの理解と支援							68分	徳永 智子（筑波大学、准教授）

各講義の内容

マイノリティの文化と心理的支援 さまざまなマイノリティと 多様性の理解	マイノリティの文化的背景（貧困、障がい、性、外国人労働者、ヤングケアラー、社会的養護、その他）について理解する。マイノリティの人々がマジョリティの文化の中で、生きにくさ、暮らしづらさ、を感じ、そして社会的不利益を抱えて生活していることがあることを理解する。心理的支援を実践する者として自身の中にある、マイノリティの文化への偏見や差別感情がもたらす心理的支援への影響を自覚する。
文化間移動のこころへの影響 外国につながる子どもの理解と支援	移民や出稼ぎ者、また海外では紛争など、やむなく故郷を去らねばならない人とその家族に焦点を当て、その方々の葛藤や喪失、そしてアイデンティティへの影響について考える。国内外における政府の移民政策やその課題についての理解を深めながら、教育現場等における現状やそこでの実践について知る。

研修シラバス

研修No	B-4-2			視聴時間	163分
研修テーマ	人間の発達と成長（163分）			受講料	4,400円

研修の趣旨

発達を捉える軸は多様であり、時代背景や文化的側面からも影響を受ける。近年、生涯発達の考え方を基本に、ライフサイクルや発達段階における課題についても、個の多様性が尊重されるようになってきている。心理職として、人間の誕生から死を迎える終末期まで、それぞれの発達段階における課題や危機を踏まえつつ、人間の成長や発達を促進したり阻害したりする要因を理解しておくことは重要である。本単元では、特に誕生から発達初期に関わる講義として、脳の初期発達の最新の知見から脳の回復力や成長力についての理解、他者や集団の中での心理社会的発達の成長促進的な要因についての理解などを取り上げ、人間の発達と成長についての基本的な視座を得られるようにする。

研修の目標

人の発達初期に関わる諸問題について理解する。
人を理解していくための多様な視点を学ぶ。
初期発達において成長や発達を促す要因や発達の段階について理解する。

研修講義設定の観点	講義形式
心理職としての倫理感・基本姿勢	講師1名による講義
人間の生活基盤に関する理解	複数名講師による講義
多職種との連携・協働	インタビュー・対談講義
全人的・包括的アセスメント	シンポジウム講義
内省的な支援の実践	

研修テーマの講義（概要）

講義	講義設定の観点					講義形式	講義時間	講師
脳とこころの発達 脳科学の知見から							58分	黒田 公美（東京工業大学 生命理工学院、教授）
人間のライフ・サイクルと心理社会的成長 愛着に焦点を当てて							78分 27分	遠藤 利彦（東京大学、教授）前半 遠藤 利彦（東京大学、教授）後半

各講義の内容

脳とこころの発達 脳科学の知見から	近年、脳や心の初期発達の重要性が指摘されている。ここでは脳や心の初期発達の最新知見について学ぶ。また、子どもの脳の負の条件や状況からの回復力、成長力についての知見も得る。
人間のライフ・サイクルと心理社会的成長 愛着に焦点を当てて	人間は他者との関係性の中で成長していく。本講義では養育者との愛着関係の形成についての総合的な知見が得られるようにする。また、集団の成長促進的な要因など、社会的な人間関係の中でのポジティブな側面について理解し、支援に役立てられるようにする。

研修シラバス

研修No	B-4-3			視聴時間	156分
研修テーマ	現場における多職種連携の実際（156分）			受講料	4,400円

研修の趣旨

対人援助職における多職種連携・協働は、クライアントを多角的かつ現実に即して理解し、最善の心理支援を行うために非常に重要である。なぜ多職種連携・協働が必要なのか、各分野における連携と協働のあり方とともにその基本的な理念を学ぶ。本研修ではいくつかの分野の講師により、さまざまな現場における多職種連携・協働の場面を想定して、心理職と関わりをもつ多職種について理解や情報共有するための事例の記録と報告の仕方や多職種連携・協働を促進するコミュニケーション・相互コンサルテーションなどの理解を深めて、現場に必要な実践力を身につける。

研修の目標

多職種連携・協働の重要性と課題を理解する。
各分野における多職種連携・協働の性質と機能を理解する。
情報共有するための実践の記録と報告に関する実践力について学ぶ。
多職種のコミュニケーションや相互コンサルテーションについて学ぶ。

研修講義設定の観点	講義形式
I 心理職としての倫理感・基本姿勢	◎ 講師1名による講義
II 人間の生活基盤に関する理解	○ 複数名講師による講義
III 多職種との連携・協働	△ インタビュー・対談講義
IV 全人的・包括的アセスメント	□ シンポジウム講義
V 内省的な支援の実践	

研修テーマの講義（概要）

講義	講義設定の観点					講義形式	講義時間	講師
多職種連携・協働の理念 教育の現場から考える							41分	石隈 利紀（東京成徳大学、教授）
連携・協働に必要な実践力 教育の現場から考える 連携・協働するためのコミュニケーション・相互コンサルテーション							55分	田村 節子（東京成徳大学、教授）
連携・協働に必要な実践力 福祉、司法の現場から考える 情報共有するための事例の記録と報告						○	60分	増沢 高（子どもの虹情報研修センター、研究部長） 橋本 和明（国際医療福祉大学、教授）

各講義の内容

多職種連携・協働の理念 教育の現場から考える	対人援助において、なぜ多職種連携が必要なのかを掘り下げ、その基本的な理念、協働の意義と面白さについて学ぶ。多職種連携において協働でできること、心理職としてできること、その姿勢について学ぶ。多職種の機関の性質や機能、職種ごとの仕事内容や現状、援助者の価値観などを理解し、具体的にどのような連携ができるのかを取り上げる。
連携・協働に必要な実践力 産業、教育の現場から考える 連携・協働するためのコミュニケーション・相互コンサルテーション	多職種連携・協働のプロセスに焦点を当てる。心理職は、コンサルタントにもコンサルティにもなる。コンサルタント、コンサルティとしての態度・スキルを獲得する。
連携・協働に必要な実践力 福祉、司法の現場から考える 情報共有するための事例の記録と報告	多職種連携・協働には対人援助職の持つコミュニケーション力が重要である。ここでは情報の共有に焦点を当てる。どのようなタイミングで、いかに適切に情報共有できるか、どのように伝達するか、その課題と在り方について理解する。さらに、情報と援助方針を共有するための記録・報告の具体的な方法について学ぶ。

研修シラバス

研修No	B-4-4		視聴時間	128分	
研修テーマ	様々な危機への対応（128分）			受講料	4,400円

研修の趣旨

現代社会において、我々が直面する可能性があるさまざまな危機について理解し、心理職として危機状況のアセスメントと対応を行う視点・方法を獲得する。加えて、災害時における支援に限らず、危機に瀕した際の支援についての考え方についても学ぶ。危機とは何かを共有した上で、各レベル（個人、家族、組織、地域、地球等）のリスクマネジメント、クライシスマネジメントの視点を心理職が持つところを整理する。たとえば、災害時における支援では、被災した方々にとって本当に必要なものは何かを正確に見きわめ、可能な限り迅速に、しかしながら際立つことなく対応することが求められる。被災者の支援はどのようにあるべきか、具体的にどのような配慮が要るのかを考える。

研修の目標

危機のアセスメントと対応の視点・方法を獲得する。
 危機対応におけるコミュニケーションにおける視点・方法を獲得する。
 危機の例として、災害における危機対応の視点・方法を獲得する。

研修講義設定の観点	講義形式
I 心理職としての倫理感・基本姿勢	◎ 講師1名による講義
II 人間の生活基盤に関する理解	○ 複数名講師による講義
III 多職種との連携・協働	△ インタビュー・対談講義
IV 全人的・包括的アセスメント	□ シンポジウム講義
V 内省的な支援の実践	

研修テーマの講義（概要）

講義	講義設定の観点					講義形式	講義時間	講師
危機への理解と支援							58分	窪田 由紀（九州産業大学、科研費特任研究員）
子ども（当事者）とのパートナーシップ - 災害被害を受けた子どもへの支援の事例から -							32分	池田 美樹（桜美林大学、准教授）
災害における危機対応 災害被災者支援の実際							38分	大澤 智子（兵庫県こころのケアセンタ、上席研究主幹）

各講義の内容

危機への理解と支援	危機のアセスメントの視点・方法（個人レベル、家族レベル、組織レベル、地域コミュニティレベル、地球レベル）、リスクマネジメントとクライシスマネジメントの視点・方法について学ぶ。また、企業における危機対応としての、ポストベンションについて考える。
子ども（当事者）とのパートナーシップ - 災害被害を受けた子どもへの支援の事例から -	課題解決の出発点となるパートナーシップに基づく取り組みを学ぶ。子どもの生活現実や心理的体験に寄り添うためには、子どもとの信頼関係を基盤として関与しながら理解を深めていく必要がある。また、働き掛けを行うための手法について理解を深める大切である。被災の影響や、個と集団の関係を踏まえた、コミュニティにおける子どもとのパートナーシップに基づく実践について学ぶ。
災害における危機対応 災害被災者支援の実際	東日本大震災、阪神淡路大震災等における、危機対応における心理職の実践について、災害時において、問題発生状況を理解し、支援活動を行うために必要な視点（現地や現場への尊重等）と具体的取組について考える。

研修シラバス

研修No	B-4-5			視聴時間	131分
研修テーマ	他者を傷つけること 暴力について考える (131分)			受講料	4,400円

研修の趣旨

人間の中に潜む攻撃性や怒りが他者に向けられると、犯罪はもとより虐待、犯罪、DV、ハラスメント、いじめなどの社会問題につながっていく。こうした背景にはどのようなことが考えられるのかを理解すること、その際の介入の視点、支援のポイントを理解することが重要である。人間の中に潜む怒りは攻撃性へと表出し、ときには暴力などの行動化となりやすい。また、行動化がない場合においても、攻撃性はクライアントとの面接の中で確認されたり、セラピストとの関係の中で顕著になってくることがある。さらに、心理職や家族、周囲の者がこの攻撃性に適切に対処できない場合も少なくない。昨今は相手を傷つけているという自覚や意識を持たないまま、SNSに書き込む等の怒りの表出をしたり、傍観者としてのいじめ、ヘイトクライムなどの問題も顕在化しており、見知らぬ他者を傷つけることすらある。本単元では、クライアントの攻撃性をどのように理解するか、暴力や加害の背景にある仕組みを知り、攻撃性に対する姿勢や技法を身につける。そして、他者を傷つける行為は自己を傷つける行為とも裏表の関係にあることを知り、その両面をみていくことの必要性を学ぶ。

研修の目標

他者を傷つける行為にはどのようなものがあるか、その背景要因を理解する。

他者を傷つけるクライアントにどのような支援が適切かを理解する。

他者を傷つけることの世代間伝達の背景を理解し、その連鎖を防ぐ要因を考える

研修講義設定の観点	講義形式
I 心理職としての倫理感・基本姿勢	◎ 講師1名による講義
II 人間の生活基盤に関する理解	○ 複数名講師による講義
III 多職種との連携・協働	△ インタビュー・対談講義
IV 全人的・包括的アセスメント	□ シンポジウム講義
V 内省的な支援の実践	

研修テーマの講義（概要）

講義	講義設定の観点					講義形式	講義時間	講師
暴力や加害の背景にあるもの							56分	藤岡 淳子（大阪大学、名誉教授）
虐待、DV、いじめ、ハラスメント 弱者への暴力を考える							75分	中村 正（立命館大学、教授）

各講義の内容

暴力や加害の背景にあるもの	暴力や加害の背景にあるものを理解する。ここでは、①攻撃衝動・性衝動と衝動制御（自律性、共感性、規範意識など）、②暴力と加害の背景にある感情（怒り、恨み、恐怖、不安、劣等感）、③認識（支配被支配性の対人認識）、価値観（暴力への親和性、暴力の必要性など）、④暴力と加害の対象（特定、不特定）、目的、手段（直接、間接（器物）、インターネット）、⑤インフォーマルな関係（対人距離の近さ）と感情（衝動）の行動化、⑥背景（孤立、貧困、被虐待体験、その他）について学ぶ。
虐待、DV、いじめ、ハラスメント 弱者への暴力を考える	虐待、DV、いじめ、ハラスメントの問題を通して、弱者への暴力について考える。ここでは、児童虐待・高齢者虐待・障がい者虐待・家庭内暴力・いじめ・ハラスメントの現状と課題、それらの背景にある支配と被支配性、さらに、虐待にいたる様々な背景について理解する。

研修シラバス

研修No	B-4-6			視聴時間	122分
研修テーマ	日々の実践を考える（122分）			受講料	4,400円

研修の趣旨

事実には客観的事実や主観的事実などさまざまな側面があり、いずれも重要な意味を持つものである。こうした事実についての違いを十分に認識し、的確な情報を得ようとする姿勢は、当事者を理解する上でも、また心理的支援を行う上でも極めて重要である。心理職は、包括的に事実を収集し、多面的・多角的に考察することを通して人間の多様な面を理解する視点が求められる。さらには、目前の事実に対する理解の仕方や事実へのアプローチの方法は、対人的な支援を行おうとする分野によっても、あるいはそこで担う役割によっても異なることを理解したい。それぞれの分野特有の視点と共通の視点について改めて考え、理解を深めることにより、心理職が事実から得た根拠に基づく心理的支援を実践していく姿勢を身につけたい。また、日々の実践を内省的に振り返るための具体的な取組の仕方について学ぶ。

研修の目標

事実とは何であるか、その持つ力と重要性を知り、包括的に事実を収集し、多面的・多角的に考察する視点を獲得する。

事実の収集と考察のプロセスを、主観と客観の視点から認知する視点を獲得する。

心理的支援の実践の振り返りに関する視点や具体的方法を知る。

研修講義設定の観点	講義形式
I 心理職としての倫理感・基本姿勢	◎ 講師1名による講義
II 人間の生活基盤に関する理解	○ 複数名講師による講義
III 多職種との連携・協働	△ インタビュー・対談講義
IV 全人的・包括的アセスメント	□ シンポジウム講義
V 内省的な支援の実践	

研修テーマの講義（概要）

講義	講義設定の観点					講義形式	講義時間	講師
日々の実践を振り返る					○		54分	増沢 高（子どもの虹情報研修センター、研究部長）
さまざまな分野における事実の取り扱い 医療、福祉、教育、司法、産業 各分野 の実践における見方・考え方							68分	神庭 重信（九州大学、名誉教授） 黒木 俊秀（九州大学、教授） 増沢 高（子どもの虹情報研修センター、研究部長） 石隈 利紀（東京成徳大学、教授） 橋本 和明（国際医療福祉大学、教授） 金井 篤子（名古屋大学、教授）

各講義の内容

日々の実践を振り返る	内省的実践の基礎として、日々の実践をどのように振り返るべきかについて考える。具体的には、人間の判断力には限界があることを自覚すること、自身の見立てに誤りがないか、常に批判的に振り返る姿勢を身につけること、実践を反芻、反省する機会としての記録、説明、話し合いの重要性を知ること、などがあげられる。また、自分の実践に対する自己評価の在り方がその後の一人ひとりの成長に大きく関わる。どのように自分の実践を振り返れば良いのか、過剰な内省とほどよい内省を考える。
さまざまな分野における事実の取り扱い 医療、福祉、教育、司法、産業 各分野の実践における見方・考え方	心理職の働く5分野における「事実」についての考え方やその取り扱い方は様々である。そこには共通性も多いが、各分野に特有の特徴もみられるであろう。各分野において重要だとされるポイントを明らかにし、それらを理解した上で、心理専門職が扱う事実とはどのようなものであるのかについて考えを深める。

研修シラバス

研修No	B-4-7			視聴時間	146分
研修テーマ	対人支援職として知っておきたい基礎知識 自傷、依存症 (146分)			受講料	4,400円

研修の趣旨

心理職として実務を行っていく上で、避けては通れない具体的な諸問題を取り上げる。自傷や自殺といった自分を傷つける問題、依存といった問題は、現代社会における深刻な問題であるが、その行為の現象面ばかりでなくさまざまな面に着目する必要がある。問題が生じる生物-心理-社会的要因は多岐にわたるため、クライアントとその生活背景に対する多面的な理解が必要であり、その理解に基づいて、クライアントが抱える生き辛さに対する適切な介入や支援が必要であろう。また、クライアントのみならず周囲の人々をサポートすることも重要である。クライアントの支援にあたって心理職として求められていることを理解し、心理的支援の実践において必要な理論や支援に関する基本的理解を深め、生き辛さを抱える人に対して、どのような姿勢で向き合うことがよりよい支援につながるのかという観点からも考えていく。

研修の目標

自傷行為に関わる多様な背景要因について理解する。
依存症に関わる多様な背景要因について理解する。
クライアントをどのように理解し、どのような支援や介入が適切かについて理解する。

研修講義設定の観点	講義形式
心理職としての倫理感・基本姿勢	講師1名による講義
人間の生活基盤に関する理解	複数名講師による講義
多職種との連携・協働	インタビュー・対談講義
全人的・包括的アセスメント	シンポジウム講義
内省的な支援の実践	

研修テーマの講義（概要）

講義	講義設定の観点					講義形式	講義時間	講師
自傷について							61分	松本 俊彦（国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所、薬物依存研究部部長(兼任)薬物依存症センター、センター長）
依存症の理解と対応							85分	松本 俊彦（国立研究開発法人 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 薬物依存研究部 部長 / 薬物依存症センター センター長、医師）

各講義の内容

自傷について	過去に自傷の経験がある者のほとんどが、病院の受診をしておらず、また、その一部の人には自殺企図の経験が認められている。思春期・青年期の人々の自傷は、把握することが難しく、調査研究も十分に行われていない実状もある。本講義では、思春期・青年期の人々の自傷の理解と支援について考える。
依存症の理解と対応	依存症は多様な状態を呈するが、本課題では依存症に関する多様な見方、考え方を知る。こうした多様な視点からの学習を通じて、依存症の単なる状態像の理解にとどまらない、依存症の本質とは何かを知り、要支援者に対する関わりを考えたい。さらに、依存症の支援にあたっては、依存症本人だけでなく、その家族への支援がその回復には必要である。依存症についてのアセスメントと支援についてさまざまな視点から考えてみたい。

研修シラバス

研修No	B-4-8			視聴時間	137分
研修テーマ	こころの病とこころの健康を考える 身体・こころ・くすり (137分)			受講料	4,400円

研修の趣旨

身体とこころの関係、すなわち、心身相関の問題は、心理学における最も重要な基本問題である。近年は、心身相関における脳の役割がさらに明らかになり、身体への働きかけを通じて、こころに働きかけるソマティックな心理的支援のアプローチも活況を呈している。しかしながら、伝統的に心理的支援の専門家は身体を扱うことを避ける傾向があり、それは今なお、多くみられる。その理由の一つは、定式化された心理療法の多くが言語的操作による働きかけを主体としてきており、ことばを介するイメージとしての身体がその実体よりも重視されてきたこと、もう一つは、クライアントの身体にセラピストが触れることが倫理的にもタブー視されてきたこと、などが関連している。本研修テーマでは、こうした心理専門職一般の身体に対する苦手意識を払拭することを第一の目標に挙げ、身体とこころとの関係について理解を深めたい。また、併せて病気や障害、さらにはこころの病に対する診断といった基本問題を押さえておく。

研修の目標

身体とこころの関係を理解し、身体に対する理解を深める。
 現場での実例を通じて、心身相関の問題について、より実践的に考える。
 精神疾患の診断をめぐる問題を通して診断やアセスメントの効用と限界を理解する。
 疾病と障害の関係について、医学的モデルと社会的モデルの意義について考える。

研修講義設定の観点	講義形式
心理職としての倫理感・基本姿勢	講師1名による講義
人間の生活基盤に関する理解	複数名講師による講義
多職種との連携・協働	インタビュー・対談講義
全人的・包括的アセスメント	シンポジウム講義
内省的な支援の実践	

研修テーマの講義（概要）

講義	講義設定の観点				講義形式	講義時間	講師
身体とこころ こころを身体の面から捉える					○	82分	黒木 俊秀（九州大学、教授） 熊野 宏昭（早稲田大学、教授） 兼本 浩祐（愛知医科大学、教授）
こころの病とこころの薬						55分	黒木 俊秀（九州大学、教授）

各講義の内容

身体とこころ こころを身体の面から捉える	身体とこころとは相互に関わりあうことについて理解を深める。こころが身体に影響を及ぼす側面だけではなく、身体がこころに影響を及ぼす側面にも注目する。イントロダクションとして、心身相関を理解することの重要性を指摘する理論を紹介し、さらに臨床現場における実例を用いながら、精神医療及び精神神経学のエキスパートとともに、より実践的に学ぶ。
こころの病とこころの薬	今日では、人々が経験するさまざまな悲哀や苦悩の医療化が進み、幼児から高齢者に至るまで医療機関において薬物療法の対象となる傾向にある。心理的支援にたずさわる心理職にも薬物療法には関心を抱いてほしい。向精神薬の種類と適応、その効用と限界について学び、薬物療法による支援との協働について考える。

研修シラバス

研修No	B-4-9			視聴時間	120分
研修テーマ	こころの病とこころの健康を考える - 精神科診療における診断- (120分)			受講料	4,400円

研修の趣旨

身体とこころの関係、すなわち、心身相関の問題は、心理学における最も重要な基本問題である。近年は、心身相関における脳の役割がさらに明らかになり、身体への働きかけを通じて、こころに働きかけるソマティックな心理的支援のアプローチも活況を呈している。しかしながら、伝統的に心理的支援の専門家は身体を扱うことを避ける傾向があり、それは今なお、多くみられる。その理由の一つは、定式化された心理療法の多くが言語的操作による働きかけを主体としてきており、ことばを介するイメージとしての身体がその実体よりも重視されてきたこと、もう一つは、クライアントの身体にセラピストが触れることが倫理的にもタブー視されてきたこと、などが関連している。本研修テーマでは、こうした心理専門職一般の身体に対する苦手意識を払拭することを第一の目標に挙げ、身体とこころとの関係について理解を深めたい。また、併せて病気や障害、さらにはこころの病に対する診断といった基本問題を押さえておく。

研修の目標

身体とこころの関係を理解し、身体に対する理解を深める。
 現場での実例を通じて、心身相関の問題について、より実践的に考える。
 精神疾患の診断をめぐる問題を通して診断やアセスメントの効用と限界を理解する。
 疾病と障害の関係について、医学的モデルと社会的モデルの意義について考える。

研修講義設定の観点	講義形式
心理職としての倫理感・基本姿勢	講師1名による講義
人間の生活基盤に関する理解	複数名講師による講義
多職種との連携・協働	インタビュー・対談講義
全人的・包括的アセスメント	シンポジウム講義
内省的な支援の実践	

研修テーマの講義（概要）

講義	講義設定の観点					講義形式	講義時間	講師
こころの病とこころの健康を考える 精神科医療における診断							74分 46分	黒木 俊秀（九州大学、教授） 山下 洋（九州大学病院、特任准教授） 杉山 登志郎（福井大学、客員教授）

各講義の内容

こころの病とこころの健康を考える 精神科医療における診断	「こころの健康と病の境界線とは？」「何のための、誰のための見立てか？」という基本問題を考えることを通じて、精神疾患の診断をめぐる問題や、診断やアセスメントの効用と限界を理解する。発達障害をめぐる多元的アセスメントについて学ぶ。
---------------------------------	---

研修シラバス

研修No	B-4-10		視聴時間	148分	
研修テーマ	病気や障害のある子どもとその家族の理解と支援（148分）			受講料	4,400円

研修の趣旨

障害についての考え方は時代や社会的状況の変化により大きく変わってきた。WHOによるICF（国際生活機能分類）の考え方により従来の障害者個人の機能障害という視点（個人モデル）から、その人々を取り巻く社会との関係における社会参加への視点（社会モデル）へと変わり、彼らの生活を支えるために何が必要かという社会的な要請へとその関心が変わりつつある。障害のある人々の支援を考える上では、生物学的及び心理的側面の理解のみならず、必要な社会資源を具体的かつ適切に用いるために他職種・他機関との連携が必須であろう。一方、障害のある人々の体験世界はさまざまな機会に多様な文脈で当事者から語られることが増えつつある。こうした当事者の経験から謙虚に学ぶ姿勢も求められるであろう。本単元では、子どもとその家族を理解していくための基本的な事項を取り上げ、クライアントやその家族の問題を多角的に考え、支援へと具体的に展開していくための視点を身につけたい。

研修の目標

障害の医学的モデルと社会的モデルの意義とわが国の障害者福祉制度について理解する。

発達障害や強度行動障害のアセスメントや支援について理解する。

障害児とその家族に対する支援の実際と心理師の役割について理解する

研修講義設定の観点	講義形式
I 心理職としての倫理感・基本姿勢	◎ 講師1名による講義
II 人間の生活基盤に関する理解	○ 複数名講師による講義
III 多職種との連携・協働	△ インタビュー・対談講義
IV 全人的・包括的アセスメント	□ シンポジウム講義
V 内省的な支援の実践	

研修テーマの講義（概要）

講義	講義設定の観点					講義形式	講義時間	講師
福祉領域における権利擁護と法制度 障害福祉分野における権利擁護と合理的配慮の考え方							31分	丹野 傑史（長野大学、教授）
多職種協働による支援と心理職の役割 障害児・者の支援における多職種協働の考え方							30分	下山 真衣（信州大学、准教授）
障害のある当事者、家族、支援者への支援と心理職の役割							40分	田熊 立（千葉県発達障害者支援センタ CAS、副所長）
強度行動障害の理解と支援の実際							47分	高橋 潔（鉄道弘済会、理事）

各講義の内容

福祉領域における権利擁護と法制度 障害福祉分野における権利擁護と合理的配慮の考え方	障害福祉と支援に関連する法制度を理解する。 障害者権利条約、障害者総合支援法、発達障害者支援法、障害者虐待防止法、障害者差別解消法
多職種協働による支援と心理職の役割 障害児・者の支援における多職種協働の考え方	障害福祉を担う機関と職種についての理解。多職種からみた心理職像と求められる役割について理解し、有効な多職種連携を検討する。
障害のある当事者、家族、支援者への支援と心理職の役割	障害のある児・者に対する支援、家族への支援、子どもと家族を支援する方々への支援等の実際と、そこにおける心理師の役割について実践事例を踏まえて理解する。
強度行動障害の理解と支援の実際	強度行動障害の子どもの理解と支援の実際について理解を深める。そこにおける心理師の役割について実践例を基に検討を深める。

研修シラバス

研修No	B-4-11		視聴時間	162分	
研修テーマ	病気や障害のある子どもとその家族の理解と支援（162分）			受講料	4,400円

研修の趣旨

障害についての考え方は時代や社会的状況の変化により大きく変わってきた。WHOによるICF（国際生活機能分類）の考え方により従来の障害者個人の機能障害という視点（個人モデル）から、その人々を取り巻く社会との関係における社会参加への視点（社会モデル）へと変わり、彼らの生活を支えるために何が必要かという社会的な要請へとその関心が変わりつつある。障害のある人々の支援を考える上では、生物学的及び心理的側面の理解のみならず、必要な社会資源を具体的かつ適切に用いるために他職種・他機関との連携が必須であろう。一方、障害のある人々の体験世界はさまざまな機会に多様な文脈で当事者から語られることが増えつつある。こうした当事者の経験から謙虚に学ぶ姿勢も求められるであろう。本単元では、子どもとその家族を理解していくための基本的な事項を取り上げ、クライアントやその家族の問題を多角的に考え、支援へと具体的に展開していくための視点を身につけたい。

研修の目標

障害の医学的モデルと社会的モデルの意義とわが国の障害者福祉制度について理解する。

発達障害のアセスメントや支援について理解する。

発達障害児に対する支援の実際と心理師の役割について理解する

研修講義設定の観点	講義形式
心理職としての倫理感・基本姿勢	講師1名による講義
人間の生活基盤に関する理解	複数名講師による講義
多職種との連携・協働	インタビュー・対談講義
全人的・包括的アセスメント	シンポジウム講義
内省的な支援の実践	

研修テーマの講義（概要）

講義	講義設定の観点					講義形式	講義時間	講師
病気・障害とこころ							45分	黒木 俊秀（九州大学、教授）
重い病気の子ども：障害とこころ －病気の子どもの心理支援－							69分	藤野 陽生（大阪大学、准教授）
神経発達症・障害とこころ 発達障害を理解する							48分	井上 雅彦（鳥取大学、教授）

各講義の内容

病気・障害とこころ	本講義では、障害学の総論として、障害の個人モデルと社会モデル、国際生活機能分類に基づく理解と支援、障害児・者に対する法制度の現状と課題、障害のある人々の自己実現と社会参加の在り方等について基本的事項を学ぶ。
重い病気の子ども：障害とこころ －病気の子どもの心理支援－	悪性新生物、腎臓病、心臓病、糖尿病等に罹患する小児は、学校教育法上は「病弱者」と呼ばれ、特別支援学校のほか、医療機関内に設置された院内学級や訪問学級等において教育を受けているが、彼らはしばしば深刻な心理的危機に直面しやすい。本単元では、病弱児とその家族が抱える心理社会的問題とその対応について学ぶ。
神経発達症・障害とこころ 発達障害を理解する	今日、発達障害の理解と支援は、心理職の活躍する全ての分野で共通して理解しておくべき喫緊の課題である。講義では発達障害（神経発達症）の概念について理解を深め、基本的なアセスメント及び支援に寄与する基本的な考え方や技法等について学ぶ。

研修シラバス

研修No	B-4-12			視聴時間	129分
研修テーマ	医療現場における虐待対応とその後（129分）			受講料	4,400円

研修の趣旨

本研修では児童福祉における具体的な諸課題について取り上げる。子どもの支援に関わる心理職にとって児童虐待の理解、子育て支援の現状についての理解は必須である。児童虐待の現状の理解とともに児童福祉の現場、医療現場での対応について具体的な理解を深める。虐待を受けた子どもたちの心理的問題並びに虐待を受けたことにより生じる具体的な問題の理解を深めるとともに、子どもたちの傷つきがさらに深まることのないようwell-beingを追求していくことが支援の要諦となる。ここでは早期発見と早期対応が大切である点から、早期の対応について特に取り上げる。

研修の目標

多職種支援チームによる支援と心理職の役割を理解する
 児童の権利擁護のための対応の実際における心理職の役割を知る。
 各現場における子どもの支援や子育ての支援の現状を知る。

研修講義設定の観点	講義形式
心理職としての倫理感・基本姿勢 人間の生活基盤に関する理解 多職種との連携・協働 全人的・包括的アセスメント 内省的な支援の実践	講師1名による講義 複数名講師による講義 インタビュー・対談講義 シンポジウム講義

研修テーマの講義（概要）

講義	講義設定の観点					講義形式	講義時間	講師
医療従事者の児童虐待対応とその後 TICの視点から							85分 21分 23分	毎原 敏郎（兵庫県立尼崎総合医療センター、医師） 大岡由佳（武庫川女子大学 准教授） 黒木 俊秀（中村学園大学、教授）

各講義の内容

医療従事者の児童虐待対応とその後 TICの視点から	<p>今日、小児科や精神科領域のみならず、すべての医療現場において虐待を疑われる事例に遭遇する機会が増えており、しばしば心理職も対応を依頼される。ここでは、小児救急の現場における事例を通して、虐待の早期発見と早期介入におけるトラウマインフォームドケア（TIC）の視点の意義、そして医療従事者が適切な対応を行なった後の経過から心理支援のあり方を考える。</p>
------------------------------	---

研修シラバス

研修No	B-4-13		視聴時間	139分	
研修テーマ	子どもの権利擁護と支援（139分）			受講料	4,400円

研修の趣旨

歴史の推移とともに、人間の尊厳や人権に対する考え方や家族の様相は大きく変遷してきた。人々の生活を支える法制度の現状はどのようになっているのだろうか。本研修では対人支援の現場で活躍する他の専門職の実践や視点を交えながら、あらためて人間の尊厳や倫理といった基本的な問題について考えてみたい。対人支援における包括的なアセスメントは、本来、当事者の最善の利益追求のための営みであり、支援者と当事者との協働作業によって展開する。しかし、その非対称性ゆえに、社会的少数者（マイノリティ）といわれる当事者の多様性（人種、民族、性、境遇、障害、疾病など）の理解に基づく実践には、今なお支援者としての課題もある。また、人々にとって最も身近な存在である家族の有り様も社会のあり方を反映して共に変化しており、こうした諸問題をあらためて関連づけながら学び、不断に問い続けることは、対人支援職として極めて重要な基本姿勢であろう。子どもたちの権利を守ることにについて具体的な実践をもとに理解を深める。

研修の目標

権利侵害の理解と権利擁護のための対応の実際における心理職の役割を知る。
 心理職及び他職種の実践家から学び、人の暮らしや生について考える。
 多職種支援チームによる支援と心理職の役割を理解する

研修講義設定の観点	講義形式
心理職としての倫理感・基本姿勢	講師1名による講義
人間の生活基盤に関する理解	複数名講師による講義
多職種との連携・協働	インタビュー・対談講義
全人的・包括的アセスメント	シンポジウム講義
内省的な支援の実践	

研修テーマの講義（概要）

講義	講義設定の観点					講義形式	講義時間	講師
基本的人権の尊重と今日的課題							60分	岩佐 嘉彦（日本子ども虐待防止学会理事長、弁護士）
人々の権利を守る社会制度の仕組み							48分	増沢 高（子どもの虹情報研修センタ、研究部長） 高橋 温（NPO法人子どもセンタ てんば理事長、弁護士） 畑山 麗衣（NPO法人Giving Tree、ピアカウンセラ）
福祉領域における権利擁護と法制度 児童福祉分野における 権利擁護の考え方							31分	高橋 温（新横浜法律事務所、弁護士）

研修テーマの講義（概要）

基本的人権の尊重と今日的課題	世界人権宣言以降の日本における人権に関する認識の展開や日本国憲法の定める基本的人権について学ぶことを通じて、人間の固有の尊厳や個人から派生する多様性の理解の端緒とする。実務者として、生命、身体の安全、発達の権利など、現代社会における様々な課題を知り、当事者のニーズを把握することや、権利擁護の視点を持てるような内容とする。
人々の権利を守る社会制度の仕組み	差別や偏見を受けやすい、いわゆる社会的少数者（マイノリティ）といわれる当事者の現状を知り、当事者が求めるニーズや、支援を行うための法律や制度を理解する。本講義では児童福祉領域における実務者としての経験から、あらためて当事者の尊厳を大切にす関わりとは何かを考え、人々の多様性の理解と最善の利益を追求することの意義を捉える。
福祉領域における権利擁護と法制度 児童福祉分野における 権利擁護の考え方	児童福祉と支援に関連する以下の法制度を具体的な課題をもとに理解する。 子どもの権利条約、こども基本法とこども大綱、児童福祉法、児童虐待防止法、DV防止法、子ども・子育て支援法、子どもの貧困対策の推進に関する法律、養子縁組あっせん法、その他

研修シラバス

研修No	B-4-14			視聴時間	121分
研修テーマ	福祉分野における連携と心理職の役割（121分）			受講料	4,400円

研修の趣旨

本研修では児童福祉における具体的な諸課題について取り上げる。子どもの支援に関わる心理職にとって児童虐待の理解、子育て支援の現状についての理解は必須である。児童虐待の現状の理解とともに児童福祉の現場、医療現場での対応について具体的な理解を深める。虐待を受けた子どもたちの心理的問題並びに虐待を受けたことにより生じる具体的な問題の理解を深めるとともに、子どもたちの傷つきがさらに深まることのないよう多職種が連携して子どものwell-beingを追求していくことが支援の要諦となろう。ここでは早期対応が大切である点から、未然防止及び早期の対応、対応にあたっての留意点について特に取り上げる。

研修の目標

多職種支援チームによる支援と心理職の役割を理解する
 児童の権利擁護のための対応の実際における心理職の役割を知る。
 各現場における子どもの支援や子育ての支援の現状を知る。

研修講義設定の観点	講義形式
心理職としての倫理感・基本姿勢 人間の生活基盤に関する理解 多職種との連携・協働 全人的・包括的アセスメント 内省的な支援の実践	講師1名による講義 複数名講師による講義 インタビュー・対談講義 シンポジウム講義

研修テーマの講義（概要）

講義	講義設定の観点					講義形式	講義時間	講師
多職種協働による支援と心理職の役割 児童福祉分野における多職種連携							43分	薬師寺 真（倉敷児童相談所、所長）
児童虐待対応の流れと心理職の役割							45分	薬師寺 真（倉敷児童相談所、所長）
子育て支援と心理職の役割							33分	八木 安理子（同志社大学、客員教授）

各講義の内容

多職種協働による支援と心理職の役割 児童福祉分野における多職種連携	児童福祉を担う機関と職種についての理解。多職種からみた心理職像と求められる役割について理解し、有効な多職種連携を検討する。
児童虐待対応の流れと心理職の役割	通告の受理、初期調査、リスクアセスメントと子どもの保護、包括的アセスメントと子どもと家族への支援、子どもと家族との関係性への支援といった展開における心理職の役割や対応における配慮について、実践事例から具体的に考える。
子育て支援と心理職の役割	子育てに関する心理教育、家族からの子育て相談、乳幼児健康診断、保育所等における子どもの相談等、一般の子育て支援の実際と、そこでの心理師の役割について実践事例を踏まえて理解する。

研修シラバス

研修No	B-4-15			視聴時間	164分
研修テーマ	子どもと家族（164分）			受講料	4,400円

研修の趣旨

子どもへの心理支援においては、今ある問題とともに、子どもやその家族の暮らしそのものに目を向け、まずは福祉的課題の有無を含めて把握した上で、さらに子どもと家族、その他の環境要因を含めた全体像として理解しようとするのが大切だとされている。そのような多面的な理解のもとに、子どもとそこにかかわる人々（家族や支援者）の抱える課題の解決に向けて、有効な支援が何かを考え、さまざまな形で提供していく必要がある。本研修では、子どもたちの暮らしや生活環境、子どもたちにとっての家族とは何かを考えるさまざまな視点を提供する。子どもたちに対する全人的な理解のために必要な知識、知見、視点等を学びながら、児童福祉領域における子どもへの心理的支援のあり方を考えていく。

研修の目標

人間の存在と発達への基盤となる家族機能や家族像について理解する。

日常生活の具体的な営みが、こころの健康や発達にもたらす意味を理解する。

家族像や地域像（故郷）とアイデンティティ形成や自尊心等との関係について理解する

研修講義設定の観点	講義形式
心理職としての倫理感・基本姿勢 人間の生活基盤に関する理解 多職種との連携・協働 全人的・包括的アセスメント 内省的な支援の実践	講師1名による講義 複数名講師による講義 インタビュー・対談講義 シンポジウム講義

研修テーマの講義（概要）

講義	講義設定の観点					講義形式	講義時間	講師
家族 我が国における家族の変遷		○					60分	神谷 哲司（東北大学、教授）
生命と存在に関わる真実告知 出自を知ること							49分	山田 勝美（山梨県立大学、教授）
家族像とアイデンティティ 社会的養育における身近な大人の役割							55分	神谷 哲司（東北大学、教授） 松永 忠（社会福祉法人別府光の園、統括施設長） 国分 美希（社会福祉法人至誠学舎立川 至誠大空の家、施設長）

各講義の内容

家族 我が国における家族の変遷	日本における家族形態や家族機能の歴史的な変遷、さらには地域社会の時代的変動や地域格差について俯瞰し、現代の家族や地域社会が抱える課題を理解する。さらに人の生命や発達において家族・地域・社会が果たしている役割と、家族や地域の今日的課題が養育環境や子どもの発達に与えている影響等を理解する。
生命と存在に関わる真実告知 出自を知ること	生命にかかわる事実、実存に関する事実（出自、人生史）などクライアントにとって大切な事実・真実の告知の視点について学ぶ。また、心理職として、クライアント自身の大切なことについて伝えることや厳しい現実の告知を行う上でプロセスで果たす役割について理解する。加えて、事実の重み付けにどのようなことがあるのか（出自、家族の悲劇や犯罪歴等）についても、具体的事例を通して学ぶ。
家族像とアイデンティティ 社会的養育における身近な大人の役割	人はそれまでの家族との暮らしをもとに家族像が形成される。家族の形態が多様化する現代、その像は多様化している。またそれまでの生活歴によって、肯定的な家族像を描く子どももいれば、否定的な家族像を抱えている子ども、さらには家族像が描けない子どももいる。家族像は、自身のアイデンティティを形成する上で大きな意味を持ち、深い実存のテーマとも関係する。心理的支援において、当事者理解の重要な一部であることを理解し、実践においてこのテーマをどのように扱うべきかを考える。

研修シラバス

研修No	B-4-16			視聴時間	165分
研修テーマ	生活を基盤とした育ちの支援（165分）			受講料	4,400円

研修の趣旨

児童福祉領域における心理支援においては、今ある問題とともに、子どもやその家族の暮らしそのものに目を向け、まずは福祉的課題の有無を含めて把握した上で、さらに子どもと家族、その他の環境要因を含めた全体像として理解しようとするのが大切だとされている。そのような多面的な理解のもとに、子どもとそこにかかわる人々（家族や支援者）の抱える課題の解決に向けて、有効な支援が何かを考え、さまざまな形で提供していく必要がある。本研修では、子どもたちの暮らしや生活環境を含めた全人的な理解のために必要な知識、知見、視点等を学びながら、児童福祉領域における心理的支援のあり方を考えていく。社会的養育の施設や児童自立支援施設に入所している子どもの問題の多くは日々の生活から引き起こされるものが少なくない。安全で安心な日々の暮らしそのものが提供されることによる治療的な意味についても、様々な現場での実践をもとに考えていく。

研修の目標

児童福祉領域における包括的アセスメントとその展開を理解し、実践できるようになる。

生活を基盤としたアセスメントと心理的支援について理解し、実践できるようになる

多職種によるチームでの支援における心理職の役割を理解する

研修講義設定の観点	講義形式
心理職としての倫理感・基本姿勢	講師1名による講義
人間の生活基盤に関する理解	複数名講師による講義
多職種との連携・協働	インタビュー・対談講義
全人的・包括的アセスメント	シンポジウム講義
内省的な支援の実践	

研修テーマの講義（概要）

講義	講義設定の観点					講義形式	講義時間	講師
生活の営みとところ 児童養護施設における暮らしを通して考える							73分	増沢 高（子どもの虹情報研修センタ、研究部長） 松永 忠（社会福祉法人別府光の園、統括施設長） 国分 美希（社会福祉法人至誠学舎立川 至誠大空の家、施設長）
司法・犯罪関連施設における生活と関係性の治療的意味 児童自立支援施設における支援と子どもの育ち							64分 28分	富田 拓（北海道家庭学校樹下庵・網走刑務所医務課、医師） 村瀬 嘉代子（日本心理研修センタ 顧問 大正大学客員名誉教授）

研修テーマの講義（概要）

生活の営みとところ 児童養護施設における暮らしを通して考える	社会的養護を必要として児童福祉施設に入所する子どもたちは、家庭での基本的な生活が立ち行かず、安全で安心な日常からかけ離れた暮らしを余儀なくされてきた子どもが少なくない。こうした子どもたちが入所後、安心できる暮らしを取り戻し、信頼できる大人との関係性を育み、心理的に回復するためには、日々の生活の場を通じた関わりが極めて重要となる。食事、入浴、睡眠等の日常生活の営みが子どもの成長と発達にもたらす意味を理解し、安全で安心な暮らしを子どもと共に作り上げていく実践について理解する。併せて、家族の病気、災害、離別など家族の重大な変化や出来事（イベント）が子どもたちにもたらす影響についても考えていく。
司法・犯罪関連施設における生活と関係性の治療的意味 児童自立支援施設における支援と子どもの育ち	非行・犯罪という行動には、その人の全存在が関わるが、近年非行少年が激減している中で、むしろ複雑性トラウマ・発達性トラウマ障害など、彼らの持つ愛着障害や発達障害といった問題がますます複雑・先鋭化している現状がある。近年、成人矯正の分野でもようやくこれらへの治療的働きかけが始まろうとしている。BPSモデルによる全人的理解と働きかけは他分野と同様不可欠であるが、行動変容への抵抗感が強い非行・犯罪の分野において、それは容易なことではなく、それぞれに対する深い知識と洞察が必要とされる。本課題では一つの事例について、「愛着」と「発達」のそれぞれの観点からその問題を読み解いてもらい、いずれの観点からもある意味で説明できてしまうことを知り、BPSモデルによる事例理解が容易ではないことを実感してもらおうと共に、それぞれの観点を活かした支援を学ぶ。

研修シラバス

研修No	B-4-17			視聴時間	131分
研修テーマ	社会的養護における心理支援の実際（131分）			受講料	4,400円

研修の趣旨

本研修では児童福祉における実践的な課題について取り上げる。子どもの支援に関わる心理職にとって児童虐待等、厳しい育ちの現状の理解は必須である。社会的養育の措置を受ける子どもの多くは児童虐待を受けている場合が半数以上であり、虐待を受けた子どもたちの心理的問題並びに虐待を受けたことにより生じる具体的な問題の理解を深めることを通じて、子どもたちの傷つきがさらに深まることのないようwell-beingを追求していくことが支援の要諦となろう。措置という厳しい局面を経て施設に入所した子どもの理解に際して、心理職として考えるべき点、また暮らしの中で支援を行っていく上で心理職が果たす役割などについて、具体的な実践における学びを通じて一人一人があらためて考えてゆけるように各現場での取組などを紹介する。

研修の目標

児童福祉領域における包括的アセスメントとその展開を理解し、実践できるようになる。
生活を基盤とした心理臨床の実践を学び、子どもの支援における心理職の役割を理解する。
多職種支援チームによる支援と心理職の役割を理解する

研修講義設定の観点	講義形式
心理職としての倫理感・基本姿勢	講師1名による講義
人間の生活基盤に関する理解	複数名講師による講義
多職種との連携・協働	インタビュー・対談講義
全人的・包括的アセスメント	シンポジウム講義
内省的な支援の実践	

研修テーマの講義（概要）

講義	講義設定の観点					講義形式	講義時間	講師
社会的養護を必要とするこどもの支援と心理職の役割1：小学校年齢児							70分	藤原 誠（子どもの虹情報研修センタ、研修課長）
社会的養護を必要とするこどもの支援と心理職の役割2：思春期・青年期							61分	増沢 高（子どもの虹情報研修センタ、研究部長）

各講義の内容

社会的養護を必要とするこどもの支援と心理職の役割1：小学校年齢児	虐待等による影響によるアタッチメントの問題やトラウマ等の問題から回復しても、自らの過酷な人生史を振り返り、深い悲しみと喪失感から自らを支えることさえ困難な状況に陥る場合が少なくない。特に思春期・青年期のアイデンティティ形成の時には大きなテーマとなる。この段階を支える課程と心理職の役割について、実践例を踏まえて理解を深める。
社会的養護を必要とするこどもの支援と心理職の役割2：思春期・青年期	虐待等による影響によるアタッチメントの問題やトラウマ等の問題から回復しても、自らの過酷な人生史を振り返り、深い悲しみと喪失感から自らを支えることさえ困難な状況に陥る場合が少なくない。特に思春期・青年期のアイデンティティ形成の時には大きなテーマとなる。この段階を支える課程と心理職の役割について、実践例を踏まえて理解を深める。

研修シラバス

研修No	B-4-18			視聴時間	123分
研修テーマ	学校組織の理解を深める（123分）			受講料	4,400円

研修の趣旨

子どもは家庭、学校、地域コミュニティの中で育っている。子どもを取り巻くさまざまな環境は、それに支えられ、子ども自身が成長していくための一つの資源となる一方で、子どもが抱える諸問題の要因ともなりうるものであり、子どもを取り巻く学校現場、学校組織を理解していくことは大切である。発達し、成長する過程において、どの子どもも援助を求めている。その上不登校、いじめ、発達障害等の諸課題により苦戦している子どもにとっては、タイムリーかつ付加的な援助が必要である。教育分野で働く心理職は、まず、すべての児童生徒が援助の対象であることを理解し、学校教育全体に関わり、学校環境を改善していく視点が必要である。さらに、今苦戦している子どもに対して、チーム学校の一員として援助する視点を持ち、それらを援助する方法を獲得していく必要がある。本研修では子どもたちが過ごす学校という場の理解を通してスクールカウンセラーの様々な役割について基本的な理解を深める。

研修の目標

行政のガイドラインも含め、日本の学校教育の現状や動向について理解する

学校組織の中で働く心理職の役割とスクールカウンセラーとしての仕事を理解する

子どもの問題、家庭や地域の問題に関する心理教育的援助サービスの視点を獲得する

研修講義設定の観点	講義形式
I 心理職としての倫理感・基本姿勢	◎ 講師1名による講義
II 人間の生活基盤に関する理解	○ 複数名講師による講義
III 多職種との連携・協働	△ インタビュー・対談講義
IV 全人的・包括的アセスメント	□ シンポジウム講義
V 内省的な支援の実践	

研修テーマの講義（概要）

講義	講義設定の観点					講義形式	講義時間	講師
教育の現状と動向							38分	仲村 健二（文部科学省児童生徒課生徒指導室、室長）
学校組織とチーム学校の理解							42分	山口 豊一（聖徳大学、教授）
							43分	石川 悦子（こども教育宝仙大学、教授）

各講義の内容

教育の現状と動向	心理職として学校における「教育」という行為についての視点を持つ。スクールカウンセラーなどとして働く心理職にとって、「生徒指導」は活動の枠組みとなる。そのため児童生徒を取り巻く、生徒指導上の課題（いじめ、不登校、自殺、児童虐待、ヤングケアラーなど）について、実態、要因、行政の対策について紹介する。またスクールカウンセラーの現状、効果的な活用、今後の在り方について、共有する。そして2022年に改訂された『生徒指導提要』の骨子（積極的な生徒指導、重層的支援構造、チーム学校）について解説する。生徒指導の定義・目的が一人ひとりの子どものウェルビーイングの向上であり、心理職（心理支援の総合職）への期待について共有する。
学校組織とチーム学校の理解	スクールカウンセラーとして働く組織・場所を知り、チーム学校・学校組織における自分の立ち位置の把握や実践の基礎を学習する。教育委員会と学校関係、学校の教育活動の共通言語となる学習指導要領や生徒指導提要の活用方法について解説する。チーム学校における心理教育的援助サービスのシステムを把握し、心理職への期待と課題を理解する視点を持つ。そして、教育現場における心理職としてのスクールカウンセラーの職務、基本となる活動、学校で働く時の基本姿勢、教職員との人間関係などについて共有する。さらに期待されている発達支持的な教育相談の取り組みについて紹介する。

研修シラバス

研修No	B-4-19			視聴時間	143分
研修テーマ	不登校、社会的ひきこもり、自殺（自死）について（143分）			受講料	4,400円

研修の趣旨

本研修では学校現場で働く心理職として、避けては通れない具体的な諸問題を取り上げる。子どもが発達し、成長する過程において、どの子どももさまざまな状況により苦戦することがあり、不登校や引きこもり、自殺等は、きわめて身近な問題として理解を深めていく必要がある。こうした問題により苦戦している子どもに対しては、スクールカウンセラーのみならずチーム学校として一丸となって援助する視点をもつことが大切であり、チームで援助していく方法やその中で果たす心理職としての役割を理解していく必要がある。ここでは、スクールカウンセラーが直面するこうした課題への理解を深める。また、子どもの多面的な理解に基づく、子どもの生き辛さに対する適切な介入や支援が求められている。さらに、子どもの支援のみならず家族をはじめとする周囲の人々をサポートも重要である。心理職として求められている役割を多角的に理解し、心理的支援の実践における基本を学ぶ。

研修の目標

行政のガイドラインも含め、日本の学校教育の現状や動向について理解する

学校組織の中で働く心理職の役割とスクールカウンセラーとしての仕事を理解する

子どもの問題、家庭や地域の問題に関する心理教育的援助サービスの視点を獲得する

研修講義設定の観点	講義形式
I 心理職としての倫理感・基本姿勢	◎ 講師1名による講義
II 人間の生活基盤に関する理解	○ 複数名講師による講義
III 多職種との連携・協働	△ インタビュー・対談講義
IV 全人的・包括的アセスメント	□ シンポジウム講義
V 内省的な支援の実践	

研修テーマの講義（概要）

講義	講義設定の観点					講義形式	講義時間	講師
不登校と社会的ひきこもり		○		○		○	40分 46分	伊藤 美奈子（奈良女子大学、教授） 齋藤 環（筑波大学、教授）
自殺（自死）について							57分	新井 肇（関西外国語大学、教授）

各講義の内容

不登校と社会的ひきこもり	社会的ひきこもりの現状と課題、不登校（在宅での長期欠席）の現状と課題、社会的ひきこもりの背景、社会的ひきこもり対策の現状と課題について理解する。
自殺（自死）について	昨今、高齢者による自殺が表面化する一方で、児童や青年の自殺が2020年以降、統計上の記録を毎年更新するような深刻な事態となっている。ここでは、児童・青年の自殺（自死）の背景とその多面的な理解をするとともに、それらの事例に対する心理的介入と一次予防の検討も行う。

研修シラバス

研修No	B-4-20			視聴時間	165分
研修テーマ	学校現場における連携と心理職の役割（165分）			受講料	4,400円

研修の趣旨

教育分野における子どもへの援助は、チームで行われる。チーム学校においては、教師、スクールカウンセラーらの子どもの学校生活に直接携わるチームの強化と学校生活環境を支える学校・家庭・地域の連携の強化の側面がある。スクールカウンセラー等として働く心理職は、子ども（当事者）とのパートナーとなるという視点とともに、子どもに日常的に関わり影響を与えている保護者や教職員と良好な関係を構築・維持していく視点も大切である。ここでは、チーム学校においてスクールカウンセラーが行っている実務の基本となる、アセスメント、コンサルテーション、コーディネーションの具体的な方法と、保護者との連携について学ぶ。

研修の目標

教職員およびチーム学校（組織）へのコンサルテーションについて理解する
地域・保護者とのパートナーシップの視点と方法を獲得する
子どもの問題、家庭や地域の問題に関する心理教育的援助サービスの視点を獲得する

研修講義設定の観点	講義形式
I 心理職としての倫理感・基本姿勢	◎ 講師1名による講義
II 人間の生活基盤に関する理解	○ 複数名講師による講義
III 多職種との連携・協働	△ インタビュー・対談講義
IV 全人的・包括的アセスメント	□ シンポジウム講義
V 内省的な支援の実践	

研修テーマの講義（概要）

講義	講義設定の観点					講義形式	講義時間	講師
子ども（当事者）とのパートナーシップ						○	40分 35分	水野 治久（大阪教育大学、教授） 小栗 貴弘（跡見学園女子大学、教授）
保護者、地域との連携						○	40分 50分	大河原 美以（大河原美以心理療法研究室） 田村 節子（東京成徳大学、教授）

各講義の内容

子ども（当事者）とのパートナーシップ	<p>子どもを中心に置きながら、特定の状況の中で生きる子どもを理解し、パートナーシップに基づく取り組みを学ぶ。はじめに、コミュニティ心理学の考え方を基に講義を行う。</p> <p>子どもとのパートナーシップを築くことは、課題解決の出発点となる。子どもの生活現実や心理的体験に寄り添うために、信頼関係を基盤として関与しながら理解を深め、働き掛けを行うための手法について実践を通して分かりやすく講義する。次に、現代社会で子どもが直面する課題について事例を取り上げ、課題の提示と解説を行う。不登校や高校中退、いじめや児童虐待、ヤングケアラー、貧困、外国につながる子ども、学校事故の影響など、個と集団の関係を踏まえ、コミュニティにおける子どもとのパートナーシップに基づく実践を検討する。</p>
保護者、地域との連携	<p>学校において保護者は子育てにおいて援助を求める当事者であり、また子どもの援助を展開していく際のパートナーである。このような2つの面をもつ保護者との関係構築において大切な視点やその方法を学び、さらに地域資源との連携について学ぶ。当事者としての保護者理解として、はじめに、子育ての困難に保護者の傷つき体験が関係していることについて理解し、保護者への支援が子育ての支援に大きな意味をもつことを考える。次に子どもへの支援へのパートナーとしての保護者という面から、保護者と援助者との相互コンサルテーションにおける、カウンセリングニーズとコンサルテーションニーズの把握の仕方や、保護者が援助のパートナーとなっていくプロセスについて理解する。保護者とのパートナーシップを中核にして、地域の援助資源も参加したネットワーク型援助チームによる連携の実践について学ぶ。</p>

研修シラバス

研修No	B-4-21			視聴時間	178分
研修テーマ	学校現場における心理職の役割を考える (178分)			受講料	4,400円

研修の趣旨

教育分野における子どもへの援助におけるアセスメントの2つの面から基本的内容を取り上げる。1つは子ども一人一人に対する理解という面で、いわゆる個のアセスメントを行う際の基本的な考え方を学ぶ。もう1つは、学校組織の中においてチームで行われるチーム学校による支援の考え方にに基づき、子どもの学校生活に直接携わるチームの強化と、学校生活環境を支える学校・家庭・地域の連携の強化を図るために、心理教育的サービスを提供していくための基盤となる家庭や地域の理解、環境面のアセスメント、学校のアセスメントについて理解を深めたい。さらにアセスメントに基づく、心理教育的援助サービスをどのように展開していくのかについて解説する。

研修の目標

学校組織の中で働く心理職の役割とスクールカウンセラーとしての仕事を理解する
 子ども、学校、環境のアセスメントの視点と方法、危機についての基本を学ぶ
 教職員およびチーム学校（組織）へのコンサルテーションについて理解する
 子どもの問題、家庭や地域の問題に関する心理教育的援助サービスの視点を獲得する

研修講義設定の観点	講義形式
I 心理職としての倫理感・基本姿勢	◎ 講師1名による講義
II 人間の生活基盤に関する理解	○ 複数名講師による講義
III 多職種との連携・協働	△ インタビュー・対談講義
IV 全人的・包括的アセスメント	□ シンポジウム講義
V 内省的な支援の実践	

研修テーマの講義（概要）

講義	講義設定の観点					講義形式	講義時間	講師
心理的支援の現場における実践的なアセスメント						○	105分	熊上 崇（和光大学、教授） 橋本 忠行（香川大学、教授）
子ども、学校組織・風土、環境のアセスメント						○	46分 27分	半田 一郎（子育てカウンセリング リソ スポ ト） 小野 純平（法政大学、教授）

各講義の内容

心理的支援の現場における実践的なアセスメント	アセスメントの要諦は、要支援者やその関係者に対する支援方針や支援計画の立案に資することと、要支援者の自己理解を促進することである。前者に対応する「アセスメントの内容」（BPSモデル、生態学的アセスメント）と、後者に対応する「検査結果やアセスメントの結果についてのフィードバック」の在り方について学ぶことを通じて、アセスメントと支援の一体性に基づく全人格的・包括的アセスメントについての視点を獲得する。
子ども、学校組織・風土、環境のアセスメント	学校では心理職はチーム学校の一員としての活動が求められる。支援の際にアセスメントが重要であることは言うまでもないが、チーム学校で求められるアセスメントについて理解する。はじめに、チームによるアセスメントや、チームに役立つアセスメントのあり方や方法について理解する。援助のために信頼関係を基盤に行われ、臨床的な情報と統計的な情報の統合を統合し、生態学的なアセスメントという特徴を持ち、学問的な基盤やエビデンスによって解釈される「賢いアセスメント」（intelligent testing）の考え方について理解する。次に、チーム学校での心理検査（主としてWISC-V,KABC-II）の実施結果（解釈）および報告について考える。

研修シラバス

研修No	B-4-22			視聴時間	156分
研修テーマ	学校現場における心理教育的援助サービス（156分）			受講料	4,400円

研修の趣旨

教育分野における子どもへの援助は、学校組織の中においてチームで行われている。ここで行われる心理教育的援助サービスは、教師、スクールカウンセラーらの子どもの学校生活に直接携わるチームの強化と、学校生活環境を支える学校・家庭・地域の連携の強化という二つの側面に支えられている。ここでは心理教育的サービスを具体的に展開していくための基盤となる家庭や地域の理解、環境面のアセスメント、学校のアセスメントについて理解を深める。またアセスメントに基づき、心理教育的援助サービスをどのように展開していくのかについて解説する。学校の環境は、それに支えられ、子ども自身が成長していくための資源である一方で、子どもの諸問題の要因ともなりうるものである。そのため、スクールカウンセラーは予防的な観点から、すべての児童生徒が援助の対象であると理解し、学校教育全体に関わり、学校環境を改善していこうとする視点も必要である。さらに発達障害等により苦戦している子どもにとっては適宜に即した包括的な援助が必要である。本研修ではチーム学校によるさまざまな心理教育的援助サービスの実践に触れ、さらにスクールカウンセラーの役割への理解を深める。

研修の目標

学校組織の中で働く心理職の役割とスクールカウンセラーとしての仕事を理解する
 子ども、学校、環境のアセスメントの視点と方法、危機についての基本を学ぶ
 教職員およびチーム学校（組織）へのコンサルテーションについて理解する
 子どもの問題、家庭や地域の問題に関する心理教育的援助サービスの視点を獲得する

研修講義設定の観点	講義形式
I 心理職としての倫理感・基本姿勢	◎ 講師1名による講義
II 人間の生活基盤に関する理解	○ 複数名講師による講義
III 多職種との連携・協働	△ インタビュー・対談講義
IV 全人的・包括的アセスメント	□ シンポジウム講義
V 内省的な支援の実践	

研修テーマの講義（概要）

講義	講義設定の観点					講義形式	講義時間	講師
家庭や地域の問題と心理教育的援助サービス						○	37分 36分	水野 治久（大阪教育大学、教授） 野田 正人（立命館大学、特任教授）
子どもの問題と心理教育的援助サービスのモデル						○	34分 49分	新井 雅（跡見学園女子大学、教授） 大石 幸二（立教大学、教授）

各講義の内容

家庭や地域の問題と心理教育的援助サービス	<p>社会のなかでの学校における心理教育的援助サービスを考える。具体的には、虐待、貧困、非行、家族の方が抱える障害の問題、外国につながりがある場合など支援を要する家庭である。福祉の視点として学校の支援をどう引き出すのか、SSWなどの福祉専門家との連携が鍵となる。事例の背景の理解には、援助要請がしにくい状況の把握がポイントとなる。心理職が保護者をどのようにエンパワーできるのか、また、その視点をもとにした教師へのコンサルテーションもポイントになる。子どもの家庭・地域の現実の問題を理解して、心理職の援助サービスの在り方を学ぶ。後半は、心理職がスクールカウンセラーとして勤務する場面における援助事例をもとに、どのようにアセスメントを行い、学校の中で心理教育的援助サービスを展開していくのか解説する。虐待への対応、保護者支援についての具体的な視点を紹介する。</p>
子どもの問題と心理教育的援助サービスのモデル	<p>心理教育的援助をめぐって求められるアセスメントと援助サービスについて、予防の視点も交えてその考え方を学ぶ。はじめに、心理教育的援助の考え方を中心に講義を行う。学校場面で子どもの問題を解決するためには、個に対する的確なアセスメントを行い、生態学的な調査と支援資源の機能化が必要とされる。また、教師や学校・地域関係者と協働しながら、第1次～第3次の支援など、階層的に心理援助を進めていく必要がある。このことを分かりやすく講義する。次に、特別支援の事例を基に課題の提示と解説を行う。特別支援教育の本格実施以降、学校や地域で様々な実践が蓄積されている。ここでは包括的行動支援（PBS）モデルに準拠しながら、学校の実情に応じた課題解決法の検討を行う。</p>

研修シラバス

研修No	B-4-23			視聴時間	163分
研修テーマ	学校現場における心理職のコンサルテーションの実際（163分）			受講料	4,400円

研修の趣旨

教育分野における子どもへの援助は、チームで行われる。チーム学校においては、教師、スクールカウンセラーらの子どもの学校生活に直接携わるチームの強化と学校生活環境を支える学校・家庭・地域の連携の強化の側面がある。スクールカウンセラー等として働く心理職は、子ども（当事者）とのパートナーとなるという視点とともに、子どもに日常的に関わり影響を与えている保護者や教職員と良好な関係を構築・維持していく視点も大切である。ここでは、チーム学校においてスクールカウンセラーが行っている実務の基本となる、アセスメント、コンサルテーション、コーディネーションの具体的な方法と、保護者との連携について学ぶ。

研修の目標

教職員およびチーム学校（組織）へのコンサルテーションについて理解する
地域・保護者とのパートナーシップの視点と方法を獲得する
子どもの問題、家庭や地域の問題に関する心理教育的援助サービスの視点を獲得する

研修講義設定の観点	講義形式
I 心理職としての倫理感・基本姿勢	◎ 講師1名による講義
II 人間の生活基盤に関する理解	○ 複数名講師による講義
III 多職種との連携・協働	△ インタビュー・対談講義
IV 全人的・包括的アセスメント	□ シンポジウム講義
V 内省的な支援の実践	

研修テーマの講義（概要）

講義	講義設定の観点					講義形式	講義時間	講師
教職員へのコンサルテーション・コーディネーション						○	29分 44分 30分	谷島 弘仁（文教大学、教授） 小野瀬 雅人（聖徳大学、教授） 小林 朋子（静岡大学、教授）
チーム学校へのコンサルテーション						○	30分 30分	家近 早苗（東京福祉大学、教授） 西山 久子（福岡教育大学、教授）

各講義の内容

教職員へのコンサルテーション・コーディネーション	教職員と連携・協働の実践を計画する力を確認し、養う。子ども・教職員や援助に関する情報の共有義務、報告義務と子ども・教職員との守秘義務について学ぶ。まず、教育現場におけるコンサルテーションの意義と目的（児童生徒にかかわる教師へのコンサルテーション・教師が行う保護者へのかかわりへのコンサルテーション）について学ぶ。次に学習面での学校組織や学級へのコンサルテーションと教職員との相互コンサルテーション（コンサルタント、コンサルティ）のタイミングや留意点などに焦点を当てて学ぶ。教職員のニーズと子どものニーズは必ずしも一致しないことへの理解を深める。
チーム学校へのコンサルテーション	チーム学校における心理教育的援助サービスの向上について計画し実践し振り返る視点を持つことを目指す。まずは、学校組織・システムレベルでのコンサルテーション、チーム援助のコーディネーションを行うための具体的なスキルの習得を目指す。あわせて、教職員を対象する校内研修の意義や方法について考える。次に、教育委員会や学校が掲げる教育目標を理解することの意味について考え、学校や教育委員会がどのような方針で学校経営をしているのかを視野に入れながら、チーム学校に対するコンサルテーション・コーディネーションを行う意義を理解する。ここでは、理論的な背景とともにSCがチーム学校に関わる事例をもとにして解説する。

研修シラバス

研修No	B-4-24			視聴時間	136分
研修テーマ	学校現場における心理職の役割を考える (136分)			受講料	4,400円

研修の趣旨

教育分野における子どもへの援助は、チームで行われる。児童生徒提要に基づくチーム学校についての基本的な考え方、そして学校現場における心理職としての役割を学ぶ。チーム学校における支援では教師、スクールカウンセラーらの子どもの学校生活に直接携わるチームの強化や学校生活環境を支える学校・家庭・地域の連携の強化の側面が大切だとされている。スクールカウンセラーとして学校現場で働く上で、心理職として、学校にいる教師、子ども（当事者）そして保護者とのパートナーとなるという視点から学校現場におけるスクールカウンセラーとしての役割について考えてみたい。また、シンポジウムでは、学校現場に関する講義シリーズで取り上げてきたさまざまな内容をもとにして、あらためて今教育現場で働く心理職が大切に考えていく必要があることは何かについて考える。

研修の目標

子どもの問題、家庭や地域の問題に関する心理教育的援助サービスの視点を獲得する 子どもとのパートナーシップの視点と方法を獲得する 学校組織の中で働く心理職の役割とスクールカウンセラーとしての仕事を理解する	研修講義設定の観点 I 心理職としての倫理感・基本姿勢 II 人間の生活基盤に関する理解 III 多職種との連携・協働 IV 全人的・包括的アセスメント V 内省的な支援の実践	講義形式 ◎ 講師1名による講義 ○ 複数名講師による講義 △ インタビュー・対談講義 □ シンポジウム講義
---	---	--

研修テーマの講義（概要）

講義	講義設定の観点					講義形式	講義時間	講師
教育の現状と動向	○	○					35分	石隈 利紀（東京成徳大学、特任教授）
教育分野における課題と心理職の役割 －学校における支援に必要な視点－							101分	石隈 利紀（東京成徳大学、教授） 家近 早苗（東京福祉大学、教授） 水野 治久（大阪教育大学、教授） 半田 一郎（子育てカウンセリング リソ スポ ト） 大石 幸二（立教大学、教授）

各講義の内容

教育の現状と動向	心理職として学校における「教育」という行為についての視点を持つ。スクールカウンセラーなどとして働く心理職にとって、「生徒指導」は活動の枠組みとなる。そのため児童生徒を取り巻く、生徒指導上の課題（いじめ、不登校、自殺、児童虐待、ヤングケアラーなど）について、実態、要因、行政の対策について紹介する。またスクールカウンセラーの現状、効果的な活用、今後の在り方について、共有する。そして2022年に改訂された『生徒指導提要』の骨子（積極的な生徒指導、重層的支援構造、チーム学校）について解説する。生徒指導の定義・目的が一人ひとりの子どものウェルビーイングの向上であり、心理職への期待について共有する。
教育分野における課題と心理職の役割 －学校における支援に必要な視点－	教育分野における心理職は、子どもに最も大きな影響を与える大人（保護者、教職員）を援助しながら、子どもが育つ環境の問題を解消し、環境を改善する役割を持つ。同時に、子どもに直接関わり、子どものパートナーとして、子どもの困りと悩みを理解して、共に問題の解消をめざす役割を持つ。この二重の役割を、教育行政の動向や学校組織の文化の文脈のなかで果たしていく視点と方法を持つことが求められる。現場での実践における今後の課題について考える。

研修シラバス

研修No	B-4-25			視聴時間	146分
研修テーマ	逸脱行動のある子どもへの多面的な理解 (146分)			受講料	4,400円

研修の趣旨

児童福祉領域における心理支援においては、今ある問題とともに、子どもやその家族の暮らしそのものに目を向け、まずは福祉的課題の有無を含めて把握した上で、さらに子どもと家族、その他の環境要因を含めた家族全体の力動、世代間を超えた連鎖などの視点を持ち、それらを全体像として理解しようとするのが大切だとされている。そうした多面的な理解のもとに、子どもとそこにかかわる人々（家族や支援者）の抱える課題の解決に向けて、有効な支援が何かを考え、さまざまな形で提供していく必要がある。本研修では、子どもたちの暮らしや生活環境を含めた全人的な理解のために必要な知識、知見、視点等を学びながら、児童福祉領域における心理的支援のあり方を考えていく。社会的養育の施設や児童自立支援施設に入所している子どもの問題の多くは複雑な生い立ちや日々の生活から引き起こされるものが少なくない。安全で安心な日々の暮らしそのものが提供されることによる治療的な意味についても、様々な現場での実践をもとに考えていく。

研修の目標

児童福祉領域における包括的アセスメントとその展開を理解し、実践できるようになる。

生活を基盤としたアセスメントと心理的支援について理解し、実践できるようになる

多職種によるチームでの支援における心理職の役割を理解する

研修講義設定の観点	講義形式
心理職としての倫理感・基本姿勢	講師1名による講義
人間の生活基盤に関する理解	複数名講師による講義
多職種との連携・協働	インタビュー・対談講義
全人的・包括的アセスメント	シンポジウム講義
内省的な支援の実践	

研修テーマの講義（概要）

講義	講義設定の観点					講義形式	講義時間	講師
暴力の世代間伝達							58分	野坂 祐子（大阪大学、教授）
逸脱行動の背景にある愛着の課題や発達課題の理解 ある事例をもとに						○	88分	富田 拓（北海道家庭学校樹下庵・網走刑務所医務課、医師） 野坂 祐子（大阪大学、教授） 田中 康雄（こころとそだちのクリニックむすびめ、医師）

研修テーマの講義（概要）

暴力の世代間伝達	暴力の世代伝達の理解は非常に重要であり、目の前のクライアントだけをみていたのではケースの理解はおぼつかない。そこには家族全体の力動、世代間を超えた連鎖などの視点が必要である。世代間連鎖に向かう要件（孤立、二次的問題、生活困窮など）と連鎖を防ぐ要件（信頼できる支援者・友人、支援を受けること、子どもの力（好きなこと、居場所）、親子の情緒的つながりなど）を理解する。
逸脱行動の背景にある愛着の課題や発達課題の理解 ある事例をもとに	非行・犯罪という行動には、その人の全存在が関わるが、近年非行少年が激減している中で、むしろ複雑性トラウマ・発達性トラウマ障害など、彼らの持つ愛着障害や発達障害といった問題がますます複雑・先鋭化している現状がある。近年、成人矯正の分野でもようやくこれらへの治療的働きかけが始まろうとしている。BPSモデルによる全人的理解と働きかけは他分野と同様不可欠であるが、行動変容への抵抗感が強い非行・犯罪の分野において、それは容易なことではなく、それぞれに対する深い知識と洞察が必要とされる。本課題では一つの事例について、「愛着」と「発達」のそれぞれの観点からその問題を読み解いてもらい、いずれの観点からもある意味で説明できてしまうことを知り、BPSモデルによる事例理解が容易ではないことを実感してもらおうと共に、それぞれの観点を活かした支援を学ぶ。

研修シラバス

研修No	B-4-26			視聴時間	125分
研修テーマ	職場におけるキャリアと心理的健康（125分）			受講料	4,400円

研修の趣旨

産業・労働分野における心理臨床においては、生活者としてのクライアントを支えるとともに、クライアントを取り巻く組織を支えることにも着目する必要がある。生活者としてクライアントの多くは働いており、まず仕事をしていく上での特徴として 社会、組織の中の個人であることと、現実の制約、現実原則、の2つを理解することが大切であろう。働く個人の問題は組織や社会の問題と複雑に連動しており、単に個人の問題として解決できる問題はなく、さらにその支援において、現実原則を無視することはできない。人は現実に生きていかなければならないからである。一方で場合によっては、職場環境に働きかけることにより、この現実原則を変えていくことも含めて、クライアントと協働していくことを考えていかなければならない。本研修では、個別の事例の背後にある組織や社会の課題等を考える意識・視点へと広げていきたい。

研修の目標

社会、組織における個人の心身の健康と心理的メカニズムとを学ぶ。
 背景にある組織のメカニズム、刻々と変化する社会のメカニズム、それらの相互影響関係を学ぶ。
 仕事とキャリア形成、キャリア支援について理解する

研修講義設定の観点	講義形式
I 心理職としての倫理感・基本姿勢	◎ 講師1名による講義
II 人間の生活基盤に関する理解	○ 複数名講師による講義
III 多職種との連携・協働	△ インタビュー・対談講義
IV 全人的・包括的アセスメント	□ シンポジウム講義
V 内省的な支援の実践	

研修テーマの講義（概要）

講義	講義設定の観点					講義形式	講義時間	講師
現代社会とキャリア キャリア形成とその支援							64分	下村 英雄（独立行政法人労働政策研究・研修機構職業構造・職業指導部門、副統括研究員）
社会集団・組織と心身の健康							61分	山口 裕幸（九州大学、教授）

各講義の内容

現代社会とキャリア キャリア形成とその支援	国や地域の文化・社会や経済のシステムによって、個人の労働観・キャリア観は様々な形で展開されてきた。人のキャリアをどのように考え、いかにその支援をしていくのか。過去から現在、将来に向けたキャリア形成とキャリア支援のあり方について、現代社会の特徴とともに考える。
社会集団・組織と心身の健康	集団や組織が個々の成員に及ぼす功罪両面の影響特性と、集団や組織自体が危機的状況を招いてしまう潜在的なリスクの心理学的特徴について理解する。そして、将来にわたって持続可能性が高く、成員が安全に健康に活動していくことのできる組織を作っていくために重要な鍵を握る取り組みについて考える。

研修シラバス

研修No	B-4-27			視聴時間	120分
研修テーマ	職場における心理支援について考える（120分）			受講料	4,400円

研修の趣旨

産業・労働分野における心理臨床においては、生活者としてのクライアントを支えるとともに、クライアントを取り巻く組織を支えることにも着目する必要がある。生活者としてクライアントの多くは働いており、まず仕事をしていく上での特徴として 社会、組織の中の個人であることと、現実の制約、現実原則、の2つを理解することが大切であろう。働く個人の問題は組織や社会の問題と複雑に連動しており、単に個人の問題として解決できる問題はなく、さらにその支援において、現実原則を無視することはできない。人は現実に生きていかなければならないからである。一方で場合によっては、職場環境に働きかけることにより、この現実原則を変えていくことも含めて、クライアントと協働していくことを考えていかなければならない。本研修では、個別の事例の背後にある組織や社会の課題等を考える意識・視点へと広げていきたい。

研修の目標

社会、組織における個人の心身の健康と心理的メカニズムとを学ぶ。
 背景にある組織のメカニズム、刻々と変化する社会のメカニズム、それらの相互影響関係を学ぶ。
 産業・労働分野における一次・二次・三次予防、およびゼロ次予防を学ぶ。

研修講義設定の観点	講義形式
I 心理職としての倫理感・基本姿勢	◎ 講師1名による講義
II 人間の生活基盤に関する理解	○ 複数名講師による講義
III 多職種との連携・協働	△ インタビュー・対談講義
IV 全人的・包括的アセスメント	□ シンポジウム講義
V 内省的な支援の実践	

研修テーマの講義（概要）

講義	講義設定の観点					講義形式	講義時間	講師
産業精神保健論							60分	高野 知樹（神田東クリニック、院長）
復職支援（リワーク）							60分	三宅 美樹（トヨタ車体研究所）

各講義の内容

産業精神保健論	多くの専門職は、来談した相談者に対し対応することはある意味慣れているし、役割だと認識できている。しかし、産業精神保健の視点ではこの活動は二次予防、三次予防に過ぎず、本来の産業精神保健の目指すところは、一次予防さらにゼロ次予防である。ここでは、勤労者の生き甲斐や労働の生産性の向上に寄与することを目的とした精神保健活動について整理する。
復職支援（リワーク）	労働者がメンタルヘルス不調により休業した場合、再発防止および他の労働者に同様のことが起きないために、組織（職場環境）と個人（労働者）の両方の要因・課題を見出す必要がある。リワークとは単に“職場に戻る”ではなく“働くことができる”であるから、復職時期は日常生活レベルから就業可能レベルまで回復していることを見極めるなどの支援が求められている。また、対象企業の休職制度など、制度との関連から現実的な支援が期待される。